



第10回 論語指導士 沖島英史（岩手県）

孔孟の昔から国難や乱世に際して儒者が役に立たないのはつとに韓非や司馬遷が指摘しており、また清末に至るまでの歴史が証明している。論語は感染症の予防や治療の呪文ではないし、論語には薬の処方も書いていない。我々論語指導士は無力であり、論語教育普及機構は認定試験や研修を開催する事も出来ないのが現状だが、それでも我々は何をすべきなのか、どうあるべきかを考える。

「子曰く、君子固より窮す。小人は窮すれば斯ち濫る、と。（衛霊公 二章）」

日本は有史以来何度も疫病に見舞われてきたが、今般の感染症にはいろいろ前代未聞の要素があり、誰しも慌て、恐れるのは当然である。しかし日本では万能ではないにしても統治機構や社会秩序が機能しており、各分野の専門家も大勢いる。我々は君子ならずとも取り乱すことなく、冷静に行動すべきである。

「子曰く、君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。（子路 二三章）」

「子貢問いて曰く、郷人皆之を好めば、何如、と。（以下略）（同上 二四章）」

「子曰く、衆之を悪むも、必ず察し、衆之を好むも、必ず察せよ。（衛霊公 二八章）」

日本人は「和」が大好きな民族だが、実際は「和」と「同」の区別がつかず、尊んでいるのは「同」である。個性を排除した「みんな同じ」に陥りやすく、所謂「市民感覚」も「私はみんなと同じ、だから正しい」に過ぎない。「みんなと違う」は「変わっている」と言う名の悪徳ですらある。しかしその「みんな」

「市民」とは一体どこの誰なのか。考え無しにただ「みんなと同じ」だと安心しているのは、主体性を放棄して自分自身を得体の知れない「みんな」「市民」に委ねる事である。今のような危機に際してこそ、個々人の主体性が重要である。

「みんなやってるから」と尻馬に乗って失敗しても「みんな」は責任を取ってはくれない。

「子曰く、其の位に在らざれば、其の政を謀らず。（泰伯 一四章、憲問 二六章）」

「曾子曰く、君子は思うこと其の位を出でず、と。（憲問 二六章）」



勿論日本には言論の自由があるが「声の大きい人」が自分の専門外の分野を語って世間に誤解や混乱をもたらす例は枚挙に暇が無い。一般人も大きな発言力を持つ事が出来るネット社会だからこそ、一人一人が発言には注意しなければならない。床屋政談程度の発言が本人の意図に反して大事になる事もある。

「加地伸行からの百字答礼」

沖島英史様へ。

国難や乱世に際して最も役に立つのは儒教の一族主義です。社会や国家は当てになりません。そこで儒教は一族の助け合いに基づいてきたのですが、明治以来、欧米の個人主義第一とし、一族主義をつぶしてきたのが日本。